

文学研究 (近代)

深津謙一郎

じつは昨年と同じテーマで依頼があり、引き受けてはみたものの、とうとう書けずに終わってしまった。言い訳をすると、近代文学研究で、表現研究に関わるめばしい成果が、最後まで思い浮かばなかったのだ。もちろん、それはたんに、筆者の勉強不足に帰する問題なのかもしれない。あるいは、近代文学を主な専門分野とする以上、「表現」に関わらない論文はない、というように開き直ることもできただろう。しかしその場合には、ある居心地の悪さがつきまとう。結局のところ、近代文学研究の現在の主流は、表現学会が目指す「表現の機構を体系づけ、表現の理論を確立する」方角に向いているとは言い難いのである。

私事になるが、この2年間(2012年3月末まで)、日本近代文学会という学会で編集委員を務めてきた。同会の会誌・『日本近代文学』は年2回刊行なので、この間、計4回、毎回、50本を越える投稿論文に接してきたことになる。むろん、このすべてを自ら査読したわけではないが、編集会議での報告を聞くかぎり、投稿論文の大半はいわゆる「文化研究」と言うべきものであった(ちなみに、投稿論文の採択率は全体で1割前後である)。

この日本版カルチュラル・スタディーズは、近代文学研究では、90年代後半頃から盛んになった。明治三十年代研究会による『メディア・表象・イデオロギー』(1997、小沢書店)と『ディスクールの帝国』(2000、新曜社)がその纏まった最初

の成果であろう。これらの仕事は、「国民国家批判」と結びつきながら、文学テキストの特権性を否定した点で衝撃的であった。そして、それはむろん、学界にとって必要な仕事であった(これによって私たちは、幅広い言説ネットワークの中に文学テキストを位置づけることができたのだから)。

しかしその垂流が同時に、「盥の水ごと赤ん坊を流してしまった」印象も(今となっては)否定できない。「文化研究」は、文学言説を新聞・雑誌や広告等の言説と同じ土俵上で等価に並べて分析するが、その結果、文学特有の「表現の機構」への関心は確実に弱まった。投稿論文から見るかぎり、近代文学研究の現在は、その傾向を一段と強めている。

ふり返れば、「文化研究」の登場によって退潮した「テキスト論」は、(それ以前の支配的なモードであった「作家・作品論」が軽視してきた)小説の「表現の機構」それ自体に即した分析を志すものだった。筆者が大学院生だった80年代中盤は、そのノウハウを学ぶうえで、シュタンツェルやジュネットが代表的な必読書であったが、最短距離での博論提出を迫られる今の若い大学院生たちに、はたしてそれが共有されているだろうか。

こうした変化は、「テキスト論」者の石原千秋が言うように(『読者はどこにいるのか』2009、河出ブックス)、大学の文学部が退潮し、日本文学専攻が日本文化(あるいはアジア文化)専攻へ改組される現況と無関係ではないのかもしれない。表現への関心後退は、文学研究にとって無論好ましいことではない。

(共立女子大学)